



MUSASHINO^{Vol.117} *for* TOMORROW

巻 頭

ラ・フォル・ジュルネと
パリの新コンサートホール

林田直樹 (音楽ジャーナリスト・評論家)

卒業生インタビュー

ピアニストを支える白い個性

小宮山 淳 (コンサートグランドピアノ技師)



表紙：深山尚久 (ヴァイオリン)

April 2016
vol.117

平成28年度を迎えるにあたって

武蔵野音楽大学学長 同附属高等学校校長 福井直敬



丘の木々が芽吹き、人間キャンパスの自然に再び春が廻ってきました。そのもとで、例年同様、全国各地から多くの新入生諸君を迎えて、平成28年度の学事が始まります。

これまで、江古田と入間の2つのキャンパスに分散して行ってきた大学の授業を、一ヶ所に統合するための「江古田新キャンパスプロジェクト」は予定通り進捗し、この夏には校舎群の全貌を目にすることができる予定です。

昭和51年から40年間にわたる、豊かな自然に囲まれた入間キャンパスでの生活に終止符を打つのは一抹の寂しさを感じますが、平成29年度から、体育実技など一部を除き、大学の授業を全て新江古田キャンパス一ヶ所で実施できることは、学事の効率化ひいては教育内容の充実向上につ

ながるものと確信しております。

この竣工と併せて、カリキュラムについて、従前の7つの学科を2つに再編・統合し新たにセメスター制を採用して、社会の要請や学生のニーズに即した新たな科目を増やしました。これにより、学生諸君が自己の意欲や関心に応じた履修科目を選択できる可能性を拡げ、多様化する学生諸君の要望に対応いたします。

すなわち、演奏学科(器楽・声楽・ヴィルトゥオーゾの各コース)では、それぞれ各コースに対する専攻実技の単位を増やし、キャンパス内の大・中・小のコンサートホールやリハーサルホールなど、充実した学修環境を活用して演奏実践を重視するとともに、各種アンサンブルや関連する授業を提供します。

また、音楽総合学科(作曲・音楽学・

音楽教育・アートマネジメントの各コース)では、1年次に幅広い視点から音楽の基礎的素養ならびに教養をじっくりと学び、その間、学生諸君自身が興味、適性、希望進路等を検討し確信を持った上で、進むべきコースを選択できる学修システムを導入しました。申すまでも無く、自己の能力を生かして入学時から専攻するコースを決定することも可能です。

また、新カリキュラムにおいては、全学生に対して、教育職員免許状及び学芸員の資格を取得可能といたします。

平成29年度から始まる、武蔵野の新しい歩みにご期待ください。



武蔵野音楽大学 入間キャンパスの春



フランス音楽紀行

ラ・フォル・ジュルネと パリの新コンサートホール

● 林田直樹 (音楽ジャーナリスト・評論家) ●

雑誌「音楽の友」「レコード芸術」の編集部にて在籍したのち、フリーの音楽ジャーナリスト・評論家となった林田直樹さん。クラシックを中心とした幅広いジャンルの音楽に関する執筆のほか、ラジオのパーソナリティーなどの活動もされています。そんな林田さんが2月にフランスを訪れて取材した、いまのクラシック音楽の世界における興味深い出来事についてのレポートをお届けします。



林田直樹 Naoki Hayashida

音楽ジャーナリスト・評論家。1963年埼玉県生まれ。慶應義塾大学文学部卒。「音楽の友」「レコード芸術」編集部を経て独立。オペラやバレエからクロスオーバーや現代音楽まで、ジャンルにこだわらない自在な執筆活動を行う。著書「クラシック新定番100人100曲」(アスキー新書)ほか。月刊「サライ」(小学館)に連載中。インターネットラジオ「OTTAVA」「カフェフィガロ」にレギュラー出演。

ラ・フォル・ジュルネ

最初の目的地はフランス北西部の港町ナント。

ここは、日本でも東京、新潟、金沢、びわ湖で毎年ゴールデンウィークに開催されている、有名な「ラ・フォル・ジュルネ La Folle Journée」音楽祭の発祥の地でもある。数日間のうちに朝から晩まで複数会場で同時多発的に、まるで集中豪雨のように1時間程度の廉価なコンサートを行うスタイルは、ここで確立された。

ラ・フォル・ジュルネは、「熱狂の日音楽祭」の名でも知られるが、その由来はモーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」の副題である。このオペラは、フランス革命の引き金をひく結果となったボーマルシェの貴族社会を風刺する劇を原作としているが、古い権威や価値が転倒し、愛ゆえに

みんながおかしなことになってしまうような、素敵な1日を過ごそうではないか、というのが音楽祭の趣旨である。

創設は1995年だから、21年も続いているこの音楽祭は、毎年、作曲家や特定の時代や地域をテーマに据えていたが、2015年からこの方針を転換し、より大きく抽象的なテーマを掲げるようになった。

ナチュール (自然)

「もはやクラシックの音楽祭という括りがふさわしくないくらい」とアーティスティック・ディレクターのルネ・マルタンはフランスのマスコミ向けの記者会見で語った。それほど、今年のラ・フォル・ジュルネでは、アジア、アフリカ、中近東などの伝統音楽やワールドミュージック勢の活躍



ナントのラ・フォル・ジュルネの最大のホール、オーディトリウムには、音楽祭のテーマ「ナチュール (自然)」に関連した映像が映し出される。なお、テロ対策として入場者すべてにはチケットの提示に加えて持ち物の検査が行われていたが、会場に入れば穏やかで平和な家族連れ、お年寄りの憩う姿が見られた

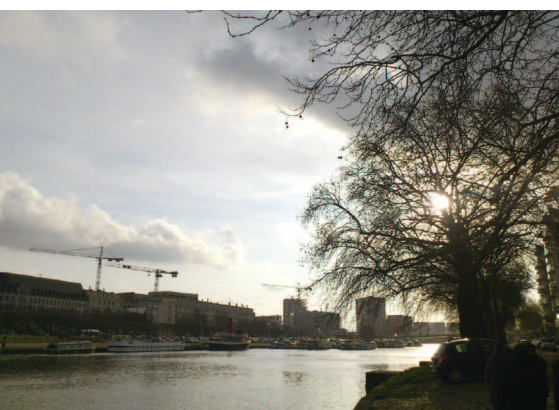


ナントのラ・フォル・ジュルネのメイン会場シテ・デ・コングレの吹き抜けロビーでの無料コンサート。アフリカの打楽器アンサンブルに人気が集まった

が目立っていた。その数は約30公演で、2月3日(水)から7日(日)まで5日間のうちに行われた全体の有料公演数341公演からすれば1割にも満たず、数の上からすれば圧倒的にクラシック音楽主体ではある。それでも彼らの存在感は光っており、音楽祭全体の雰囲気大きく変えた。

今年のテーマは「ナチュール(自然)」。このテーマが、否応なしに伝統音楽やワールドミュージック、大衆音楽への垣根を越えさせた。何よりも、「非西洋」へのまなごしを強く感じさせる内容であった。

アフリカの打楽器アンサンブル、ドラマーズ・オブ・ブルンジは、オープンスペースでの力強くカラフルな演奏が、まるで日本の祭囃子の太鼓のようで、祝祭的な雰囲気を盛り上げるのに大いに貢献した。今回の変化の象徴的存在である。



ナントはロワール川の河口にある港湾都市で、その起源は古代ローマ時代にまで遡る。中世以降はブルターニュ公国の首都、大西洋にのぞむ奴隷貿易の港としても栄えた歴史を持つ

その他にも、中近東やアジアの伝統音楽が大きな注目を集め、サウンド的にも、これまでにないほど大胆に多様性が広がった。ほとんどの聴衆にとっては未知の世界である。

クラシック音楽には、もともと知識や経験のある

者が優位に立つような雰囲気があるが、これほど未知の音楽が集まってくると、誰しもがゼロからの状態でパフォーマンスに接しざるを得ない。それはある意味、「平等」の実現でもある。

全体の9割を占めるクラシック音楽にしても、中世・ルネサンス音楽からバロック、古典派、ロマン派、近現代、そして実験音楽まで、万遍なく幅の広いプログラムが展開された。

これほどの多様性を前に、自分の狭い好みの世界だけに閉じこもろうとすることは、かえって難しい。よほど臆病で保守的な人でさえも、冒険をしたくなるような誘惑に満ちた音楽祭へと進化した。

混沌のおもしろさ

「清濁合わせ呑む」という言葉があるが、今年のナントのラ・フォル・ジュルネはまさにそういうものになっていた。クラシック音楽をある意味比喩的に言うなら、きれいな水に住む魚の世界である。ある種の芸術至上主義、選良主義、エリート主義。そういったものは「上流」のものである。

しかし、今年のナントの様相は、濁った水の中にも面白い魚がたくさん住んでいるのだということを、体現していた。たとえばエルサレムの民族音楽オーケストラは、ユダヤの大衆歌謡と伝統音楽の混淆物なのだ

が、良くも悪くも「いかがわしい」魅力に満ちた、場末のナイトクラブから出てきたような音楽であった。

自然と宇宙が大きく視野に入ってきたことも、今回の特徴だ。自然科学者や詩人たちの言葉を引用した朗読、映像演出、植物園での体験型コンサート、鳥の鳴き声の模倣芸まで飛び出して、音楽とそうでないものとの境界線さえ揺らいでくるような仕掛けが随所に施されていた。

こうした音楽祭の全体像は、クラシック音楽界の今後の方向性を示唆するものでもある。さまざまな音がかオス的に混在する状況だからこそ、かえってハイドンやベートーヴェンなどの古典的な響きが、人間の理性の光、コスモのようにかけがえなく感じられたこともお伝えしておきたい。相互は補い合うのである。

フィルハーモニー・ド・パリ

ナントの帰路にはパリに一泊した。

昨年春にオープンした噂の新コンサートホール「フィルハーモニー・ド・パリ」でマウリツィオ・ポリーニのリサイタル(2月8日)を聴くのが目的である。

パリ中心部からやや北東のはずれにある地下鉄ポルト・ド・パンタン駅のすぐ近く、休日には人々が憩うラ・ヴィレット公園の一角に、フィルハーモニー・ド・パリはある。隣にはパリ・コンセルヴァトワール(パリ国立高等音楽院)、シテ・ド・ラ・ミュージック(フィルハーモニー2と名称変更されたホール)があり、一大音楽エリアが形成されている。

公演前には、観客側から見るホールだけでなく、アーティストが使う楽屋やリハーサル室など、広報責任者がホール内部の各所を英語で丁寧に説明しながら案内してくれた。

彼らのオフィスも見せてもらったが、各スタッフに静かでプライベートな個室が与えられており、ガラス張りで見えるようになっていた。

以前メトロポリタン・オペラの内部取材したときも感じたことだが、欧米のオフィスは、各スタッフには末端でも個室的なスペースが与えられていることが多く、決して閉じてはおらず半ドアもしくはガラス張りになっている。そこでリラックスしながら適度な緊張感をもって仕事に集中できるようになっていて、うらやましく感じる。

それに比べると、日本の会社のように大部屋で、上下関係を象徴させた配置で机を寄せ合いながら仕事をするのは、意思疎通には便利かもしれないが、むしろ相互監視的というか、個人というものを信用しないことを前提とした息苦しい組織に思えてしまうのは、考えすぎだろうか？

「学ぶ」ための場

フランスを代表する著名な建築家ジャン・ヌーヴェル設計によるフィルハーモニー・ド・パリは、大胆な曲線とガラスを豊富に用いた超現代的なデザイン、そして木々や陽光をイ

メージさせる内装が特徴である。地下には学習室がいくつも設置され、その中には世界中の民族楽器、クラシック音楽の各種楽器が博物館のように取り揃えられ、訪れた人は子どもから大人まで誰でも自由に演奏できるようにになっている。もちろんノイジーな音しか出せないだろうが、それでも楽器にこれだけ自由に触れられるスペースが確保されているのは素晴らしい。

家族連れ、子どもたちを連れた学校教師たちが、自由にここを使えるようになっている。年齢別のカリキュラムも充実しているようだ。ここはただ音楽を贅沢に消費するためのコンサートホールではなく、何よりも「学ぶ」ための場であり、それはすべての人々に与えられるべきだ、という発想がここにはある。

学校だけが学ぶところなのではない。生涯にわたって学ぶことこそが喜びであり、それは権利でもある、という考え方はパリだけでなくナントの音楽祭でも感じたことだ。会場ではただコンサートをたくさん行うだけでなく、音楽学者たちのレクチャーや朗読会も多く、充実した書店ブースには常に誰か作家や学者がいて、ただサイン会をするのではなく、誰でも気軽に話しかけられるように待機していたのは印象的だった。

街とともに生きるホール

フィルハーモニー・ド・パリに話を戻すと、このホールは公園の中にあり、人々の行き交う通路の中にすんなりとなじんでいる。屋上庭園は出入りが自由で、ホールの入り口は人々の歩く場所の交差する場にある。ホールの内部と外部は峻別されないのだ。街の中にあり、街とともに生きるコンサートホール。それがフィルハー



フィルハーモニー・ド・パリのホール。曲線主体、左右非対称の斬新な空間。二重の壁に包まれている

モニー・ド・パリの考え方だ。それを最も強く感じたのはリハーサル室の作りだ。

通常、音楽ホールや劇場のリハーサル室は、遮音性を確保するために、窓がないことが多い。都市と音楽との断絶がそこにはある。しかしここでは広大な窓がとられ、しかも窓の外には夜になると高速道路の自動車群の光が幻想的に音もなく目前を通り過ぎていく。いまパリの街の中にいる、この現代社会の中に暮らし、生きている人々の営みの中に、自分たちの音楽は存在する、ということを強く意識しながら、演奏家たちはリハーサルを行うことになる。

リハーサル室の数は多い。それもそのはず、ここはパリ管弦楽団が本拠としているのみならず、古楽団体のレ・ザール・フロリサン、現代音楽集団のアンサンブル・アンテルコンタンポラン、パリ室内管弦楽団、イル・ド・フランス国立管弦楽団のレジデンスともなっている。5系統の演奏団体に加えゲストの演奏家たちが次々にここを訪れる。彼らはお互いを意識しあいながら、同時多発的にリハーサルや本番を行う。リハーサル室や楽屋周辺で、アーティストたちは、隔てられた別々の存在ではない。複合的に一緒に存在する。それを意識させられるホールなのだ。



フィルハーモニー・ド・パリの学習室。世界中の民族楽器やクラシック音楽のさまざまな楽器が自由に誰でも触れ、体験演奏できるようになっている。1日中いくらでも遊べてしまいそうだ

コンサートホールのあるべき姿

メインの大ホールは、すべてが柔らかな曲面で作られ、微妙に非対称的な空間。暖色系の配色が美しい。壁の凹凸は幾何学的で可愛らしくポップでさえある。何よりもユニークなのは、二重の殻に包まれたような独特の構造である。内壁と外壁の間には5メートルくらいの空間がとられており、そこを歩いて人々はホールの内部に入る。この内壁と外壁の間のスペースが共振して、音響を豊かにするのだ。

本番でポリニーがピアノを弾き始めたとき、これまで東京文化会館やサントリーホールで聴いていた彼の音と全く別の響きを感じた。しいて言うなら、それは「静寂の充実」である。弱音がとにかく素晴らしい。それはホールの音響が、本来ポリニーの持っていた音と音の間のあいだにあった音楽を雄弁に表現してくれたからだ。ホールの外側をとりまくホワイエ

や廊下は、じゅうたんが敷き詰められており、微妙なカーヴと勾配がつけられている。フラットではない。それが不思議に落ち着く。天井からは木洩れ日のようなまばらな光が落ちてくる。上階にあるカフェ「ル・バルコン」は、モダンで洗練されたカウンターバーが大人の雰囲気、窓から見える広大なパリの夜景が、夢のように非日常的で美しい。驚くべきは、葉が密生したような斬新なデザインの椅子で、これがカフェ全体の現代的なトーンに、不思議な自然のイメージを与えている。

街の中にある、自然も感じられる、生きている音楽の場所。さまざまなジャンルの音楽が同時多発的に生まれてくる場所。ただ一部の人々が音楽を贅沢として消費するのではなく、すべての人々にとってより身近で、学べるような必須の何かとして音楽がある場所。それが、フィルハーモニー・ド・パリが意味する未来の新しいコンサートホールのあるべき姿であり、思想だ。

クラシック音楽と民主主義

以上、フランスの2つの取材を通して感じたのは、彼らが常に、いまある権威や前例というものにとらわれず、自由な発想で新しいものを作り出そうとする活力を持っているということである。

その活力の源とは何かというと、実は「民主主義」ということとつながっているのではないだろうか。彼らにとって民主主義とは、多数決や普通選挙といった表面的な手続きのことを言うのではない。一人一人の心を、すなわち個人を大切にすることであり、異なる考え方、他者を尊重するということであり、とりわけ弱者や子供たちの未来を大切にすることである。クラシック音楽もまた、一部の特権階級のための贅沢ではなく、人間性の「権利」の問題としてとらえられている。

まだまだ私たちが彼らに学ぶべき点は多い。

音楽の万華鏡 34

唱歌

「唱歌」というと、「ふるさと」とか、「春の小川」といった歌を思い浮かべる方が多いであろう。戦前までは学校で行われる音楽の授業のことを「唱歌」といっており、その授業で歌われる歌も「唱歌」と呼ばれた。明治14年(1881)5月4日に出された文部省達第12号には「小学初等科は修身、読書、習字、算術の初歩及び唱歌、体操とす」とあり、日本が近代的な教育制度を実施しようというその最初から「唱歌」が行われていたのである。

早くから小学生にも西洋音楽の様式にもとづく唱歌を教え、近代国家日本の音楽文化の向上をめざしていたのかというと、どうもそうではないらしい。それま

で、鎖国によって、「日本」という国家のアイデンティティとは無縁に過ごしてきた日本人が(藩のアイデンティティはあった)、開国を迫られ、いきなり国際社会に放り出され、近代的な国民国家を形成しなければならなかった。全国の子供たちに一斉に同じ歌を教えることで、日本人なら「みんなが知っている歌」、日本人なら「誰もが歌える歌」を共有し、国民としてのアイデンティティを築くことが急務だったのである。

と同時に、唱歌は、知識の伝達普及という役割も担っていた。昨年暮れから今年の正月にかけて、横浜開港資料館では、「その音奇妙なり」という展示が行われたが、そこには、開国当初の横浜ならではの様々な音楽活動を描く絵画や写真とともに、『鼠疫予防 鼠唱歌』というのが展示されていた。鼠のもたらす疫病をどのように防ぐかが歌詞として歌われたので

ある。

今日の指導要領には、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」とあるが、さしずめ、当時の唱歌教育は、「国民国家の一員たる自覚を植え付け、また近代国家の社会に役立つための知識を身に付けさせることを目的としていた」のである。

広く世界の民族の音楽を見渡すと、音楽だけを取り出して、純粋に表現の手段や鑑賞の対象として、用いている民族は、必ずしも多くない。音楽には様々な意味と用途があることに気付かされるのである。音楽と人間の関係は多様で複雑である。

藤田治子(本学音楽学教授)

卒業生インタビュー

ピアニストを支える白い個性

● 小宮山 淳 ●

(コンサートグランドピアノ技師／カワイ音楽振興会 次長／アーティストサービス室 室長)

本誌の創刊号(1987年)に、当時大学4年生でトロンボーンを専攻していた一人の若者が登場しました。ヨーロッパ演奏旅行に参加した感想を語る彼が、現在、河合楽器製作所のピアノ調律師として活躍されている小宮山 淳さんです。その仕事ぶりは、昨年末、NHK-BS「もうひとつのショパンコンクール 〜ピアノ調律師たちの闘い〜」でも紹介され、ご覧になった方も多いのではないのでしょうか。調律師になった経緯、調律師の仕事ぶり、目指す音づくりなどについて



小宮山 淳 Atsushi Komiya

1962年5月5日東京生まれ。6歳よりオルガンを、8歳からピアノを、12歳よりトロンボーンを始める。'83年武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科トロンボーン専攻入学、同大学オーケストラメンバーとして欧州ツアーに参加し、'87年卒業。同年、株式会社河合楽器製作所ピアノ事業部ピアノ研究所に入社し、コンサートグランドピアノの製造過程及びピアノ調整技術を習得。その後社内試験に合格し、'92年から'94年まで2年間海外技術研修生としてドイツを中心とした欧州に滞在、技術・語学研鑽を積む。帰国後数々の国際ピアノコンクールにおいてステージピアノの調整を担当し現在に至る。現在カワイ音楽振興会に所属しアーティストサービス室室長を兼務。

お話をうかがいました。
(2016年2月9日取材、文責編集部)

真面目、忍耐、感性

—— まず、小宮山さんが調律の道に進んだ経緯を聞かせてください。

小宮山 大学4年の後半あたりから、親知らずの影響で歯並びが変わってしまい、トロンボーンが上手く吹けなくなってきました。演奏家以外の道を、となったとき、河合楽器製作所(以下、カワイ)が世界を舞台に活躍できる調律師の養成に乗り出すことを知り、初めてコンサートチューナーという職業に出会い興味を持ちました。そして卒業後にカワイのピアノ研究所に就職し、徒弟制度のもと、親方から厳しく教え込まれました。

—— 調律師の仕事を簡単に説明してください。

小宮山 ピアニストがステージで自分の音楽性、芸術性を存分に発揮するために必要な作業をする仕事。それが、コンサートチューナー、調律師の仕事です。具体的な作業は、道具を使って音、ピッチを合わせる「調律」。メカニック、アクションを均一に調整し、さらに好みに合わせて重めにし



たり、軽めにしたりする「調整」。そして、弦を叩くフェルトを硬くしたり柔らかくしたりして音を整えていく「整音」。この三つはそれぞれ連動していますから、その組み合わせを考えつつ、ピアニストの要望に応えるように音を作っていきます。

—— どのような人が調律師に向いていますか？

小宮山 私のことはさておき(笑)、根が真面目な人、最後まで諦めない人ですね。手先が器用でなくても、真面目な人はコツコツ努力しますので、最終的には優秀な技術を身に付



▲ 本誌創刊号(1987年)



けることができます。長い時間を掛けて習得する技術ですから、それに耐えられる精神力があれば大丈夫。あとは感性。音楽の感性という意味ではなく、何かを見たり聞いたりしたときに、いろいろな想像を働かせる能力が大切です。

ピアニストとの絆

—— これまでに、たくさんの国際的ピアノコンクールを経験されていますね。

小宮山 ショパンコンクール以外では、イタリアのブゾーニ国際コンクール、ロシアのラフマニノフ国際コンクール、チャイコフスキー国際コンクール、オーストラリアのシドニー国際コンクールなど。国内では浜松、高松、仙台。チャイコフスキーには6回行っています。

—— NHK-BS「もうひとつのショパンコンクール」に興味深く拝見しました。このコンクールは二度目だそうですが、一度経験していると違うものですか？

小宮山 それは違いますね。初めてのホールだと、そのホールの響きや温度変化、空調の状況などを把握するのに丸一日かかりますから。

—— ピアニストの闘いとともに、調律師もメーカーを代表して闘っているようでした。

小宮山 調律師同士は、意外と仲が

いいんですよ。普通に話をして、携帯の番号も交換し合って。お互いに足を引っ張り合うのではなく、お互いのピアノをより良くしようという感じですね。

—— ピアニストとの信頼関係の深さが画面を通じて伝わってきましたが、コンテスト参加者との交流で印象に残っていることは？

小宮山 今回に限らず、カワイのピアノを弾いてくれた方のほとんどが、「家族といる時のような時間を過ごすことができ、ステージに集中できた」と言ってくれます。共にコンクールを闘った戦友という仲間意識が生まれ、その後もお付き合いが続いていくケースが多いですね。

巨匠のリクエスト

—— その時々で求められる音は違うと思いますが、小宮山さんの音づくりの基本は？

小宮山 落としどころを見つけると言いますか、歩み寄ることだと思います。ピアノは1台ごとに違うので、まずそのピアノが持っている音を大事にします。例えばそのピアノがホールに合っていない場合、もともとの

音の資質は残しながら味付けをし、最終的にホールに合うように持っていくます。むりやり方向を変えようと、ピアノが嫌がります。このピアノはどのような音を出したいのか…それに耳を傾けつつ整えていく。ただし、小宮山カラーが出過ぎないようにする。ピアニストが自分の音を出しやすいようにすることが最優先ですから。私が入社したとき、上司がこう言いました。「白い個性を持て」と。いろいろな色に染まることができる、でも個性がないとダメだということですね。それを常に心掛けています。

—— 調律師の仕事のやり甲斐は？

小宮山 私自身、トロンボーンをやっていたせいか、何かを支えたいという素養が基本にあるようです。調律も同じ。トロンボーンはオケやブラスでは全体を支える役目。調律師も演奏者を支える仕事。調律したピアノを、ピアニストが満足してくれて演奏会が成功する、またコンクールで良い結果を残す、そうした成果が出たときは、大変嬉しく満足感が得られます。

—— 著名なピアニストのミハイル・プレトニョフが休止していた演奏活動を再開したのも、カワイのピアノ



▲ 2015年のショパンコンクールにて（ワルシャワ国立フィルハーモニーホール／ポーランド）



▲ ミハイル・プレトニョフ氏と小宮山さん。
プレトニョフ氏がモスクワ市内に所有するコンサートホール（オーケストリウム）にて



▲ 巨匠とツーショット

との出会いがきっかけだったそうですね。

小宮山 モスクワ音楽院の大ホールの隅に置かれていたカワイのピアノを、プレトニョフさんが気に入ってくれたのが縁。来日した折に弊社の工場を訪れ、私が調律したピアノに触れて、こうおっしゃいました。「このピアノと、このピアノを調律した調律師をヨーロッパに派遣してくれたら、私は演奏会を再開します」。そこから話はとんとん拍子に進み、7年ぶりのヨーロッパツアーに同行することになったんです。久しぶりの演奏会でナーバスになっておられたのか、リハーサルの間際の調律への注文も頻繁でした。リクエストは「とにかく音は柔らかく」。これでもかというくらい柔らかくしても、「アツシさん」と私を呼び寄せ、「まだダ

メ、まだダメ」と何度もダメを出されました。でも当日のリハーサルの際、私を振り返ってニコッと笑い、「これでいきます」。ツアーは大成功に終わり、それ以後、ヨーロッパ、アジアでの演奏会では、私たちのチームがお手伝いさせていただいています。

アンサンブルの大切さ

—— 学生時代の思い出を聞かせてください。

小宮山 たくさん悪友がいました（笑）。彼らに誘われて学友会に入り、大学祭で学生の演奏会を取り仕切ったりしました。トロンボーンを師事したのは、1～2年次は相馬清美先生、3～4年次は木下利男先生。当時、先生は神様みたいな存在で、尊敬すべきお師匠さんに叱咤されながら4年間で過ごしました。江古田時代で思い出すのは、年2回の試験。グループコンサートという名の試験で、一般にも開放されるんですが、最前列に陣取るのは先輩たち。その先輩たちが、試験が

始まると同時に「プレッシャー」と書いた紙を一斉に広げるんです。あれには参りました（笑）。

—— 武蔵野のヨーロッパ演奏旅行にも参加していますね。

小宮山 あの経験があったおかげで、海外生活に対する恐怖心がなくなり、外国が身近なものになりました。すごくハードなスケジュールで、1ヵ月のツアーのあいだに、なんと15回の公演。3日連続なんてこともありました。

—— 小宮山さんの今後の抱負は？

小宮山 私が身につけた技術と経験を、後輩に少しずつ伝承していきたいですね。技術と経験、そして財産でもある人脈を若手に引き継いでいって、徐々に後方支援にまわっていきたいと考えています。

—— 最後に、武蔵野の後輩へのメッセージをお願いします。

小宮山 社会人になって初めて分かることですが、24時間を思い通りに使えるのは、学生のときだけ。勉強はもちろんですが、時間のやりくりをつけて、友人や先輩、後輩、そして先生方まで、色々な人とコミュニケーションの時間を作るべきです。ネットワークを広げ、多くの人の考え方に触れて感性を磨いてください。そうすれば、どんな職業に就くにしても、きっと役に立つはず。音楽でアンサンブルが大事のように、人との付き合いを大切にしてください。



▲ 学生時代の小宮山さん（本誌創刊号より）

来年初頭の竣工に向け、快調

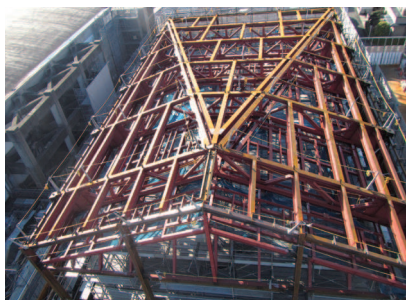
竣工までいよいよ1年を切った江古田新キャンパス—— 本号では平成28年1月から3月までの工事の様子をお伝えいたします。

徐々に見えてきた 大規模プロジェクトの全貌

年末年始のひと時の休息の後、新築工事は平成28年1月4日から約1年後の竣工に向けて再スタートしました。現場内には大型のタワークレーンが4基設置され、前号でもご紹介したユニークなグラフィックシートが貼付された仮囲いの外からも、本工事が大規模プロジェクトである事が、キャンパス周辺の方々に判る様になってまいりました。

工事の進捗状況ですが、まずブラームスホール棟、リハサルホール棟を配置する北側工区においては、地上鉄骨工事が1月中旬から約3週間の日程で完了し、引き

続き各階の鉄骨鉄筋コンクリート構造物が構築されました。ブラームスホール棟は、傾斜した特徴的な外壁や屋根スラブ(屋根の加重を支えるコンクリートの床板)のコンクリート打設が完了し、この号が出る3月末に躯体の上棟を迎える予定です。また、オーケストラホール棟は、片流れ屋根を受ける柱および梁のコンクリート打設が3月に完了し、4月の中旬には屋根スラブのコンクリートの打設が完了予定で、5月初旬に躯体の上棟を迎えます。両棟からは内部のコンクリートを受けていた型枠などの材料を順次搬出し、外壁サッシの取り付けや、建物を保持する鉄骨を火災による崩壊から守るため、コンクリートを巻き付けない鉄骨梁への耐火被覆吹付という工程を施していく予定です。また、電気・衛生空調などの設備工事にも取り掛かっていきます。



▲ ブラームスホール棟屋根トラス
(平成28年2月2日)



▲ ウィンドホール内部
(平成28年2月17日)



▲ ブラームスホール ホワイエ階段
(平成28年2月19日)



▲ 現場全景 空撮 (平成28年1月22日)

に進む各棟の建築工事

一方、博物館、図書館、教室、レッスン室、事務室、サンクンガーデンなどを配置する南側工区では地下1階からのコンクリートによる構造体を構築する工事を継続して進めています。タワークレー

ンを設置した事でより遠くに多くの資材を移動出来るようになり、工事は順調に進んでいます。博物館や事務室、展望ラウンジが配置される南棟については、北側のホール棟同様、関係業者を集め鉄骨上棟迄の安全を祈願して、地下1階からの鉄骨工事が2月中旬から開始されました。3月末には1階の床までの躯体工事が完了し、4月からの地上鉄骨建方に向けた準備期間に入ります。

また、東棟には打楽器レッスン室、ピアノ等練習室、レッスン室が配置される予定ですが、それぞれひと部屋ずつを先行す

る形で、外装建具やガラス、内部の防音効果のある扉などの内装工事を3月中旬より順次施工開始し、部屋の音響効果などを検証する為の準備にも着手していきます。



▲ ブラムスホール棟(左奥)、リハーサルホール棟(右奥)
(平成28年3月1日)



▲ リハーサルホール棟、中央棟、東棟
(平成28年3月1日)



▲ 現場南東から見たタワークレーン (平成28年3月1日)

表紙の顔



み や ま な お ひ さ
深山尚久さん

深山尚久さんは、武蔵野音楽大学で教授としてレッスン、室内楽、オーケストラの指導に当たられ、優秀な学生を多数育てています。

東京都出身。1980年東京藝術大学卒業、1982年同大学院修了。ヴァイオリンを海野義雄氏に、室内楽をルイ・グレラー、ビュイグ＝ロジェの両氏に師事。1984年ドイツのフライブルグ国立音楽大学に文化庁海外芸術家派遣研修員として留学し、ヴォルフガング・マーシュナー氏の下で研鑽を積みしました。

大学院在学中に、東京フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターに就任。以来、新星日本交響楽団、札幌交響楽団、広島交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、東京交響楽団のコンサートマスターを歴任する他、国内ほとんどのプロ・オーケストラの客演コンサートマスターを務めました。

1991年室内楽グループ『JYACMS』(Japan Young Artist Chamber Music Society)を結成し、これまで23回の定期演奏会を開催しています。1997年には台湾のキールン国際現代音楽祭にソリストとして招かれ好評を博しました。1998年サントリーホールにて3曲の協奏曲を一夜で演奏する『ヴァイオリン・コンチェルトのタベ』を、東京交響楽団と開催。また、国内主要オーケストラとの協奏曲の協演や各地でのリサイタル、室内楽活動、放送出演、指揮、教育等、日本の音楽界を担うヴァイオリニストとして幅広く活躍しています。

現在、武蔵野音楽大学教授、深山アカデミー主宰、日本弦楽指導者協会本部・関東支部理事、ソナレ・アートオフィス所属。使用楽器ピエトロ・ガールネリ。

【主なCD・著書等】

- 三枝成彰：ヴァイオリン協奏曲『雪に蔽われた伝説』の初演CD(東芝EMI)
- CD「愛の言葉」(オクタヴィア・レコード)
- ヴァイオリン教則DVD「ヴァイオリン・テクニカル・クリニック／基礎～応用ポイントマスター」、「ヴァイオリン・テクニカル・クリニックII 実践編／基礎～応用ポイントドリル」
- 著書「目からウロコのポイントチェック／Let's ヴァイオリン・レッスンI, II」「目からウロコのポイントチェックI ヴァイオリン・レッスン58の上達例」(スタイルノート)

本学合唱団、東京芸術劇場コンサートオペラ『サムソンとデリラ』に出演

去る2月20日、武蔵野音楽大学合唱団(合唱指導:横山修司本学准教授)は、東京芸術劇場コンサートオペラ vol.3、サン＝サーンス: 歌劇《サムソンとデリラ》～フランス語全3幕／演奏会形式～に出演しました。[会場: 東京芸術劇場コンサートホール、指揮: 佐藤正浩、管弦楽: ザ・オペラ・バンド(在京オケの演奏家中心で編成)]

旧約聖書を原作としたこのオペラは、キャスティングや演出の困難さにより、日本では上演機会が少なく、この度の上演は、2001年メトロポリタン歌劇場の来日公演以来となる、東京での全曲公演として話題になりました。

タイトルロールには、世界で活躍しているソリスト(サムソン: R. ラ・スピナ、デリラ: M. ニコリッチ)を迎え、重要な男声ソリストに、著名なオペラ歌手(甲斐栄次郎氏、妻屋秀和氏、ジョ



ン・ハオ氏)が出演。本学の学生、卒業生で編成された合唱団は民衆役で共演し、厚みのある豊かな響きで、物語を支える重要な役割を演じました。また合唱メンバーにも加わっている本学卒業生の小笠原一規、鈴木俊介、井出壮志朗の三氏がソリストとして歌い、共に好評を博しました。

舞台は、照明、音響を駆使し、終幕最後の神殿崩壊の場面では、大迫力の照明演出を用いるなど、壮大なストーリーを表現するドラマティックな演奏と相俟って素晴らしい公演となりました。満席となった会場からは拍手が鳴り止まず、ブラボーの掛け声とカーテンコールが続きました。

学友会の社会貢献活動

ミュージックフェスティバルにおけるバザーの売り上げを寄付

毎年秋に開催される本学ミュージックフェスティバルでは、実行委員会がバザーを企画し、在学生、教職員に呼びかけて物品の提供をいただいて運営しています。その売り上げは「練



馬区社会福祉協議会」「入間市社会福祉協議会」「東日本大震災被災地(岩手・福島・宮城へ毎年1県ずつ)」「当該年度の自然災害被災地(平成26年広島市、平成27年常総市)」に寄付され、社会福祉事業や災害復興事業に生かされています。長年の寄付活動は学友会としての地域連携の一環であり、また学生のボランティア意識の醸成にもつながっています。

ミュージックセラピー研究部、2年連続で「杉並区青少年善行表彰」受賞

本学のクラブ・サークル活動のひとつ、ミュージックセラピー研究部は、練馬区、杉並区等の社会福祉施設や特別支援学校で、音楽を通した様々



なボランティア活動を年間20回以上行っており、生徒さん、利用者の方々の生活支援・教育活動のお手伝いをさせてもらっています。その活動が認められ、平成26、27年度に「杉並区青少年善行表彰」を受けました。

これまででも、その他公的機関から多数の表彰を受けていますが、さらに活動が評価されたことは学生たちの励みとなり、今後、善意の輪が広がることを期待したいと思います。

元気いっぱい三幼稚園発表会

武蔵野音楽大学第一、第二、武蔵野の三幼稚園では、それぞれ2月末に「ひなまつり音楽会」や表現発表「桃の会」

を行いました。

園児たちは、バッハザールや幼稚園ホールで、レッスンを重ねてきたバイオリンや木琴などの合奏、合唱や劇、オルフェメソッドを取り入れたリズムと歌などを披露しました。元気いっぱいに練習の成果を発揮できたことは、子どもたちの自信になったようです。保護者をはじめ、たくさんのお客様から温かい拍手を



いただき、あちらこちらで嬉しそうな笑顔が見られました。

また、3月3日には、三園合同音楽鑑賞会がバッハザールで行われました。武蔵野音楽大学と大学院のお兄さんお姉さんによる演奏で、ピアノやトランペットの独奏、ソプラノの独唱を聴きました。たっぷりとクラシック音楽を鑑賞し、園児たちは保護者と一緒に、音楽にあふれた楽しい時間を過ごしました。



着任外国人教授紹介 (平成28年度前期)



ケマル・ゲキチ *Kemal Gekic* (ピアノ/クロアチア)

1962年クロアチア生まれ。旧ユーゴのノヴィサッド音楽院で学ぶ。史上最高得点でディプロマを取得。1981年国際リスト・ピアノコンクールで第2位に入賞。1985年のショパン国際コンクールでは、聴衆の圧倒的支持を得て名誉賞受賞。その後世界各地で活発な演奏活動を展開し大好評を博す。幅広いレパートリーでCD録音も積極的に行い、特にリストの演奏では、第一人者として不動の地位を築いている。フロリダ国際大学教授。



リチャード・メイン *Richard Mayne* (ウィンドアンサンブル指揮/米国)

アリゾナ州立大学にて指揮とトロンボーンを専攻。音楽教育の学士と修士の学位を取得。オハイオ州立大学にて博士号を取得し、同大学バンドの指揮者も務めた。その後、アリゾナ州にて高校教員として勤務し、その間、アリゾナ・バンド&オーケストラ協会の会長を務めた他、テンペ・シンフォニー・オーケストラのトロンボーン奏者としても活躍した。現在は米国コロラド州にあるノーザンコロラド大学音楽学部の教授、シンフォニックバンド、マーチングバンドのディレクターを務めている。アメリカン・バンドマスターズ・アソシエーション (ABA) 会員、ナショナル・バンド・アソシエーション (NBA) 副会長。指揮者としての多忙な活動の他、米国各地やカナダなどに於いて、審査員、クリニシャンとしても活躍している。

編集後記

卒業生インタビューにご登場いただいた小宮山さん。約30年前の創刊号で将来についてこう語っています。「どんな仕事であれ、自分のやったことが社会に反映し、その結果が明確にわかること、それを第一条件として、今後の指針にしていきたい」。現在、ピアノ調律師として世界を舞台に活躍し、後進の育成にも努めている姿は、まさに学生の時の言葉どおり。さて、あなたの30年後は？ 想いが叶うかどうか、日々の積み重ねの先に答えがあります(編)。

MUSASHINO 掲示板

平成27年度音楽大学卒業生演奏会(桃華楽堂)

平成28年3月30日(水)、皇居内にある音楽ホール桃華楽堂で、在京の5音楽大学の代表による「音楽大学卒業生演奏会」が、皇后陛下ご臨席のもと開催されます。

本学からは、原 日向子さん(ハープ独奏)が出演し「サルゼード：古い様式の主題による変奏曲 作品30」を披露させていただきます。

レインボウ21 サントリーホール デビューコンサート2016に採択される

サントリーホールが、エデュケーション・プログラムの一環として実施している「レインボウ21 サントリーホール デビューコンサート」。次代を担う音楽家や音楽業界を目指す学生が自ら企画し、大学の協力の下、サントリーホールと連携してプログラムの作成から舞台構成、広報活動などの全ての公演制作を行う演奏会として高い注目を集めています。毎年首都圏の音楽大学から多数の企画が出されますが、本年は本学と他に1大学が採択されました。

武蔵野大プロデュースは「西洋音楽奇譚 一異文化の衝撃と憧れ」で、6月7日(火) 19:00 サントリーホール ブルーローズで開催されます。

平成27年度クロイツァー賞受賞者

わが国のピアノ音楽発展に寄与したレオニード・クロイツァー教授の名を冠した「クロイツァー賞」。教授とゆかりが深かった東京藝術大学、国立音楽大学、武蔵野音楽大学の大学院修了生の中から、毎年特に優れた成績を修めた学生が選出されます。平成27年度、本学からは福井敬介さんが選ばれました。

記念演奏会は7月10日(日) 14:00 東京文化会館 小ホールで開催されます。



武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここに芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。

学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成27年11月16日から平成28年1月31日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、ご寄附いただけるようになりました。クレジットカード決済により簡単にお手続きができます。是非ご利用ください。

【同窓生】 石渡百合子様 柏村和可子様 斎藤叡子様 澤田昌子様 田中路恵様 仁科篤子様 福井紀子様 村上達俊様 川崎隆先生門下生一同様 同窓会神奈川県支部西湘むさしの会様 同窓会福島県支部様 同窓会宮城県支部様 平成13年度入学生同期会一同様

【在学生・同ご父母】 泉 茂美様 芹川泰造様 辻 広巳様 山田浩実様

【役員・教職員・一般・他】 大内孝夫様 岡 珠世様 加島良和様 金澤雅子様 コッホ幸子様 坂下 寛様 坂下裕子様 戸田 史郎様 長尾立矢様 福井直敬様 福井直祥様 吉田香織様 渡邊規久雄様 (他に匿名を希望される方7名)

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

(順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

●2015年12月にフィンランドのシベリウス協会より

「シベリウス・メダル」を授与される 渡邊規久雄（本学教授）

●埼玉県「平成27年度下総院一音楽賞（音楽文化発信部門）」受賞 栗山文昭（本学教授）

●チェコ国立ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団に第一ヴァイオリン奏者として入団（平成28年2月）

後藤博亮（平成23年大学ヴァイオリン専攻卒業）

●第19回イスラエル国際ハーブコンクール（イスラエル）セミファイナリスト（入賞）原 日向子（大学4年ハーブ専攻）

●第26回日本ドイツ歌曲コンクール 奨励賞受賞（学生の部1位）山本将生（大学4年声楽専攻）、●第1回ロシア声楽コンクール プロフェッショナル部門 ジュニア部（大学・大学院生）第1位入賞 津久井瑛子（平成26年大学声楽専攻卒業、本大学院2年）、高橋彩音（大学4年声楽専攻）、第3位入賞 奥秋大樹（大学4年声楽専攻）、●2016年小澤征爾音楽塾オーケストラオーディションに打楽器・ティンパニ奏者として合格、セイジ・オザワ 松本フェスティバルに出演 古立 匠（平成27年大学打楽器専攻卒業）、●芸劇ウィンド・オーケストラ・アカデミーに打楽器奏者として合格 古立 匠（平成27年大学打楽器専攻卒業）、●第9回横浜国際音楽コンクール ピアノ協奏曲部門 第2位入賞 岩武 歩（大学3年ピアノ専攻）、●第16回北関東ピアノコンクール 本選進出部門（ソロ）大学生Sの部 第2位入賞 大竹千寛（大学1年ピアノ専攻）、●第7回東京ピアノコンクール 大学部門 第3位入賞 吉原麻実（大学1年ピアノ専攻）、●第16回スガミピアノコンクール 音大生・一般部門 銅賞受賞 伊藤菜々子（大学1年ピアノ専攻）、●第25回日本クラシック音楽コンクール 全国大会 コントラバス部門 大学の部 第3位入賞 宮澤麗奈（大学3年コントラバス専攻）、●第16回北関東ピアノコンクール 本選進出部門（ソロ）高校生Sの部 第1位入賞 渡辺愛菜（附属高校3年ピアノ専攻）、●第2回和幸ウィンドコンテスト 高校生部門 金賞、ヤマハ賞受賞 山口真生（附属高校3年クラリネット専攻）、●中学生・高校生のための第12回日本管弦打楽器ソロ・コンテスト 高校生 木管楽器部門 金賞、川越市長賞受賞 佐々木成美（附属高校1年サクソフォーン専攻）、●第25回日本クラシック音楽コンクール 全国大会 声楽部門 高校女子の部 第3位入賞（1、2位なし）長島有葵乃（附属高校1年声楽専攻）

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

平成28年度 夏期講習会のお知らせ

平成28年度の武蔵野音楽大学、武蔵野音楽大学附属高等学校の夏期講習会（音楽大学受験講習会、高校音楽科受験講習会、社会人のための夏期研修講座、免許法認定講習）を、下記のとおり実施します。

講座名	会場
大学受験講習会 1期:7/28～7/31 2期:8/2～8/5 3期:8/25～8/28	入間 キャンパス
高校音楽科受験講習会 1期:7/28～7/30 2期:8/25～8/27	
社会人のための夏期研修講座 7/31～8/2	
免許法認定講習 7/25～8/5 ※教員免許状更新講習とは異なります	

※実施日程、会場が昨年と変更となっている講習会があります。詳細は要項でご確認ください。

◎講習会要項は6月上旬発行の予定。要項の請求は、大学ウェブサイト、または本学企画部広報課（TEL.04-2936-9737）よりお申し込みください。（要項は無料、郵送料は本学が負担します）大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/>

平成28年度 教員免許状更新講習のお知らせ

武蔵野音楽大学では、平成28年度も教員免許状更新講習を開講します（現在認可申請中）。本学では、小学校、中学校および高等学校の、音楽を中心とする教員を対象に、必修領域6時間、選択必修領域6時間、そして選択領域18時間、合計30時間を開講します。

講習期間	会場
①必修領域（6時間） ②選択必修領域（6時間） ③選択領域（6時間）	7/20・21の2日間 7/22～24の3日間
	入間 キャンパス

◎要項は4月下旬発行の予定。要項の請求は、大学ウェブサイト、または本学企画部広報課（TEL.04-2936-9737）よりお申し込みください。（要項は無料、郵送料は本学が負担します）大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/>

平成 28 年度 4 月～7 月 演奏会のお知らせ

武蔵野音楽大学音楽学部新人演奏会 ～平成 27 年度卒業生による～

4 月 18 日(日) 19:00 トッパンホール

¥1,500 (全席自由)

武蔵野音楽大学大学院修士課程在学学生によるコンサート 4 月 25 日(日) 18:00 バッハザール (入間)

無料 (全席自由・整理券不要)

武蔵野音楽大学大学院修士課程新人演奏会 ～平成 27 年度修了生による～

5 月 9 日(日) 19:00 トッパンホール

¥1,500 (全席自由)

イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル

5 月 23 日(日) 18:00 バッハザール (入間)

¥1,000 (全席自由)

曲目=シューマン: アラベスク Op.18、クライスレリアーナ Op.16 他

レインボウ 21 サントリーホールデビューコンサート 2016 6 月 7 日(火) 19:00 サントリーホール ブルーローズ

¥2,000 (全席自由)

武蔵野音楽大学プロデュース『西洋音楽奇譚—異文化の衝撃と憧れ—』

ニュー・ストリーム・コンサート 28 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会～

6 月 15 日(水) 18:00 バッハザール (入間)

無料 (全席自由・要入場整理券)

ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタル リストとバッハのタベ

7 月 4 日(日) 18:00 バッハザール (入間)

¥1,000 (全席自由)

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会

指揮=リチャード・メイン

曲目=J. ヴィリアムズ: ニュー・イングランド讃歌

A. コーブランド: アパラチアの春

L. パーンスタイン: キャンディード序曲、J. ジルー: リフテン・ウェド、V. クォン: サウンド・アンド・スモーク

八木澤教司: 太陽への讃歌—大地の鼓動、2016 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲より 他

7 月 11 日(日) 18:30 アクロス福岡シンフォニーホール (福岡県)

7 月 13 日(水) 18:30 アクトシティ浜松 大ホール (静岡県)

上記両日とも 一般 ¥1,500 / 小・中・高 ¥1,000 (全席自由)

7 月 15 日(金) 18:30 東京芸術劇場 コンサートホール

¥1,500 (全席指定)

お問合せ ● 武蔵野音楽大学演奏部 TEL.04-2932-3108

※やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

※チケットは武蔵野音楽大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/> でもご予約ができます。

平成 28 年度 武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 オープンキャンパス・学校説明会

武蔵野音楽大学及び武蔵野音楽大学附属高等学校のオープンキャンパス・学校説明会を開催いたします。当日は、本学の教育内容、入学試験、キャンパスライフ、進路などをご説明、ご希望の方は本学教員によるレッ

スンや個別相談が受けられます。さらに大学のガイダンスでは、平成 29 年度よりスタートする江古田新キャンパスと新たなカリキュラムについてご紹介いたします。ぜひご参加ください。※詳細は後日発表いたします。

日付	種別	開催地
5 月 29 日(日)	学校説明会	茨城県つくば市 「ヤマハミュージックアベニューつくば」 栃木県小山市★ 「ヤマハミュージックリテイリング小山店」
	オープン キャンパス	入間キャンパス
6 月 12 日(日)	学校説明会	静岡県浜松市 「アクトシティ浜松 研修交流センター」 長野県松本市★ 「㈱ミュージックプラザオグチ 松本センター」 福岡県福岡市「アクロス福岡」
	学校説明会	山梨県甲府市★ 「コラニー文化ホール(山梨県立県民文化ホール)」

日付	種別	開催地
6 月 26 日(日)	学校説明会	北海道札幌市 「六花亭本店きたこぶしホール」(ガイダンス会場) 「ヤマハミュージックリテイリング札幌店」 「ヤマハ札幌センター」(レッスン会場) 宮城県仙台市「常盤木学園」★
	学校説明会	岡山県岡山市★ 「ヤマハミュージックリテイリング岡山店」 「ミュージックサロン岡山シンフォニー」
7 月 9 日(土)	学校説明会	香川県高松市 「レクザムホール(香川県県民ホール)」
	学校説明会	愛知県名古屋市中区 「ヤマハミュージックリテイリング名古屋店」

★大学のみ開催(高等学校の説明会は実施しません)

【お問合せ】武蔵野音楽大学 入学センター TEL.04-2936-9844

E-mail: nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

各種クリニックのお知らせ

武蔵野音楽大学では、演奏技術の向上を目指す方を対象に、各種クリニックを開催します。当日は、レッスン、個別相談、ミニコンサート、その他の企画をお楽しみいただけます。ぜひご参加ください。

※詳細は後日発表いたします。

日付	種別	開催地
5 月 8 日(日)	ピアノクリニック	武蔵野音楽学園施設(江古田キャンパス近く)
6 月 5 日(日)	管打楽器クリニック	入間キャンパス
	弦楽器クリニック	武蔵野音楽学園施設(江古田キャンパス近く)
7 月 17 日(日)	声楽クリニック	入間キャンパス

【お問合せ】武蔵野音楽大学 入学センター TEL.04-2936-9844

E-mail: nyugaku-c@musashino-music.ac.jp



タロガトー

シュンダ社製 1935年頃 ハンガリー 全長67cm

タロガトーはハンガリーの楽器で、民族音楽の演奏では広く使われている。かつてはダブルリード楽器であったが、1890年代に楽器製作者シュンダにより写真のようなシングルリードのものが作られた。現在はこのタイプが普及している。形状はソプラノサクソフォンに似ており、木製の本体にオーボエに似たキイシステムを備え、その音質は深く渋い。

18世紀初頭、ハンガリーの貴族ラーコーツィⅡ世の率いる反乱軍が、オーストリアからの独立を求めて蜂起した。その際に、タロガトーは独立運動の精神を表す楽器として支持者により吹き鳴らされた。この反乱は失敗に終わるが、そのため、運動の象徴的存在であったタロガトーの演奏もしばらくの間禁止された。こうした歴史的経緯により、その後タロガトーは「自由のシンボル」としてハンガリーの人々の心に深く根付くことになった。

ところでラーコーツィⅡ世の名は、有名な「ラーコーツィ行進曲」のタイトルにも使われている。この行進曲は、もともとはハンガリーに古くから伝わる作曲者不明の楽曲であり、「ハンガリー行進曲」とも呼ばれ



るが、独立運動を行ったラーコーツィⅡ世が好んだことから、別名「ラーコーツィ行進曲」とも呼ばれるようになった。この曲はベルリオーズやリストらが作品の中で用いたことでも知られている。

タロガトーは、ハンガリーでは「ラーコーツィ・シップ」とも呼ばれたという。この楽器はハンガリー人の誇りを表す楽器として、国民的英雄ラーコーツィの名と共に、人々に親しまれている。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

大学機能の一時移転のお知らせ

武蔵野音楽大学は、現在進行中の「武蔵野音楽学園江古田新キャンパスプロジェクト」に伴う新築工事のために、平成29年3月まで大学の機能を入間キャンパスに移転しています。期間中は何かとご迷惑、ご不便をおかけいたしますが、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

❖ 目 次 ❖

- 平成28年度を迎えるにあたって ①
福井直敬
- ラ・フォル・ジュルネとパリの新コンサートホール ②
林田直樹
- 音楽の万華鏡 ⑤
唱歌 薦田治子
- 卒業生インタビュー ⑥
ピアニストを支える白い個性 小宮山 淳
- 江古田新キャンパスプロジェクト REPORT ⑧ ⑨
来年初頭の竣工に向け、快調に進む各棟の建築工事
- MUSASHINO NEWS ⑪
 - ❖ 本学合唱団、東京芸術劇場コンサートオペラ『サムソンとデリラ』に出演
 - ❖ 学友会の社会貢献活動 ❖ 元気いっぱい三幼稚園発表会
 - ❖ 着任外国人教授紹介 ❖ MUSASHINO 掲示版
 - ❖ 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
 - ❖ 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
 - ❖ 平成28年度 夏期講習会のお知らせ
 - ❖ 平成28年度 教員免許状更新講習のお知らせ
 - ❖ 平成28年度 4月～7月の演奏会のお知らせ
 - ❖ 平成28年度 武蔵野音楽大学・附属高等学校オープンキャンパス・学校説明会
 - ❖ 各種クリニックのお知らせ

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発 行 ❖

学校法人 武蔵野音楽学園

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111（代表）

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121（代表）

バルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711（代表）

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2016年4月1日発行 通巻第117号